

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

**崖上のスパイ
(悬崖之上/Cliff Walkers)**

2021年/中国映画
配給: アルパトロス・フィルム/120分

2022 (令和4) 年 12月 19日鑑賞 オンライン試写

Data 2022-142

監督: 張藝謀 (チャン・イーモウ)
出演: 張譯 (チャン・イー) / 于和偉 (ユウ・ホーフェイ) / 劉浩存 (リウ・ハオツン) / 朱亞文 (チュウ・ヤーウェン) / 秦海璐 (テン・ハイルー)

👁️👁️ みどころ

チャン・イーモウ (張藝謀) 恐るべし! 40年前に「中国映画ここにあり!」と全世界に発信した彼は、北京の冬季・夏季五輪の総監督のみならず、本業の映画でも次々と新作を発表し、輝いている。“ほんわか名作”路線から“ド派手ワイヤー”路線まで何でもござれの彼が、今回はじめて“スパイもの”に挑戦! その舞台は、満州事変直後の満州国ハルビン。その任務は“ウートラ作戦”という何とも過酷なものだから、ビックリ! なぜ、今そんな映画を?

そんな疑問もあるが、さすがチャン・イーモウ。『007』シリーズは第2作目の『ロシアより愛をこめて』(63年)が最高傑作だが、原題『悬崖之上』、英題『Cliff Walkers』の意味は? それもしっかり考えながらチャン・イーモウ監督初のリアルかつ過酷なスパイ映画を堪能したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■チャン・イーモウ恐るべし! 近時の大活躍に注目! ■□■

中国第5世代監督の代表はチャン・イーモウとチェン・カイコーだが、2008年の北京夏季五輪で開会式と閉会式の総監督を務めたチャン・イーモウは、2022年2月の北京冬季五輪の開会式と閉会式の総指揮も務めた。そんな彼の、近時の映画作りにおける大活躍はすごい! 直近だけでも、①『SHADOW/影武者』(18年) (『シネマ45』265頁)、②『愛しの故郷』(20年) (『シネマ49』240頁)、③『狙撃手』(22年) (『シネマ50』200頁)、④『ワン・セカンド 永遠の24フレーム』(20年) (『シネマ51』186頁)と、公開が相次いでいる。しかして、原題を『悬崖之上』、英題を『Cliff Walkers』、邦題を『崖上のスパイ』とした本作は一体ナニ?

チャン・イーモウ作品は、戦争モノから純愛モノ、歴史モノから武侠モノまで多岐にわたっているが、これまで唯一なかったものがスパイものだ。そして、本作は、そのスパイ

もの！スパイものは、米国の CIA の優秀なスパイを主人公とした『ボーン』シリーズや、英国の MI6 の優秀なスパイを主人公にした『007』シリーズのように西欧が中心だが、中国だって負けてはいない。しかして、本作冒頭、1931年9月18日満州事変以降の日本帝国主義の蛮行の字幕が表示されるが、さて、本作のスパイたちは？

■□■時代は1934年。舞台は満州国/ハルビン。4人は？■□■

日本は1941年12月8日、真珠湾を攻撃し、対米英戦争に突入した。そのため、1945年8月15日に敗戦を迎えた後、“あの戦争”を太平洋戦争と呼ぶようになったが、開戦当初の呼び名は大東亜戦争。その発端は、1931年9月18日の満州事変だ。つまり、日本は決して米英との戦争を目指していたのではなく、日本が目指したのは、中国東北地方に満州国を作り、五族協和の精神の下、日本国をリーダーとして大東亜共栄圏を築くことだった。しかし・・・。

もちろん、それは日本側の一方的な言い分だから、大陸内を一方的に侵略された中国がそれに抵抗したのは当然。チャン・イーモウ監督の代表作である『紅いコリアン』（87年）にも日本軍に対する中国人民の抵抗の姿が描かれていたが、本作が設定した1934年当時は日本による満州国建国が佳境に入っていた時期。そんな時期に、①張憲臣（チャン・シエンチェン）（張譯（チャン・イー））、②楚良（チュー・リャン）（朱亜文（チュウ・ヤーウェン））、③小蘭（シャオラン）（劉浩存（リウ・ハオツン））、④王郁（ワン・ユ）（秦海璐（チン・ハイルー））、という4人のスパイたちが、雪深い森の中にパラシュートで降り立ったが、彼らの任務は一体ナニ？

■□■なぜロシアで訓練を？極秘作戦ウートラ計画とは？■□■

『愛しの故郷』の第5話「マーリアンの魔法の筆」（『シネマ49』253頁）では、中国東北部の村に住む画家のマーリャンが、元レスリング選手だった妻の強力な推薦のおかげで、ソ連の有名美大への留学が決定するシークエンスから始まった。2022年の今は、ロシア（プーチン大統領）と中国（習近平国家主席）の力関係は大きく変わっているが、1930年代の中国にとっては社会主義の先輩たるソ連は憧れの国だった。そのため同作ではソ連の美大への留学のために妻は懸命に尽力したのに、故郷の町に残りたいマーリャンは、ソ連で留学生生活を送っているフリを偽装していた。

しかし、本作は違う。つまり、男2人、女2人で構成された本作冒頭に登場する4人は、ソ連で特別訓練を受けたスパイの超エリートだ。彼らがソ連からハルビンに派遣されたのは、極秘作戦“ウートラ（烏特拉）計画”を実行するため。ウートラとはロシア語で「夜明け」を意味する言葉で、その任務内容は、日本軍の秘密施設から脱走した生き証人である王子陽を国外に脱出させ、日本軍による人体実験などの蛮行を広く世界に知らしめることだ。

『SHADOW／影武者』は、白黒の世界観の中で中国流の武俠映画の美しさを際立たせ

ていたが、本作冒頭は、一面雪景色の中、雪の重みに耐えかねた樹木から大量の雪が落下するシーンから始まる。『八甲田山』（77年）では、日露戦争に備えて雪中行軍をする日本陸軍が想像を絶する雪量のため遭難し、北大路欣也扮する神田大尉が「天は我を見放した！」と叫ぶシーンが目には焼きついている。そんな目で、本作冒頭にみる、極寒の満州国の雪に注目！

4人のスパイチームはそんな深い雪の中、1組の張憲臣と小蘭、2組の楚良と王郁の二手に分かれることになったが、それはなぜ？そして、ここから彼らが向かう先は？

■□■密室劇の醍醐味を、ハルビンに向かう列車の中で！■□■

潜水艦は徹底した密室だが、走っている列車も密室。他方、密室殺人事件は探偵小説における永遠のテーマだ。したがって、列車モノにおける殺人事件の発生とその犯人追及劇は推理小説の定番であり、醍醐味だ。

他方、列車は10両でも20両でも繋ぐことができるから、密室とはいえ、移動できる空間は広いし、隠れる場所もトイレの中はもとより、列車の上や横にもある。したがって、列車内での追跡劇は、ド派手なカーチェイスとは異質の移動に伴う緊張感を生むことになる。そんな列車スリラーを得意としたのがアルフレッド・ヒッチコック監督だが、本作導入部では、ハルビンに向かう列車の中で二手に分かれて座った4人のスパイ達と日本のハルビン警察特務科との間で息詰まる攻防戦が展開されるので、それに注目！そこには、東大、京大から優秀な医師が多々集結していただろうから、当時の日本の倫理観に基づいたもの。もっとも、そこでの確実な極秘中の極秘！だって、それが漏れて連盟から文句でも言われたら、やっかいなもの。なるほど、なるほど・・・。

本作はストーリー展開ごとに、1章「暗号」、2章「行動」、3章「底牌」、4章「迷局」、5章「陰棋」、6章「生死」、7章「前行」と小見出しがつけられているが、この列車内での密室劇のキーワードは「暗号」。その暗号は、第1組の張憲臣が第2組の2人のためにトイレに書き残したものだが、そんな小細工で特務科を欺けるの？

近時の日本のTVドラマは、何でも説明調、その上、何でもお笑い芸人風の空虚な会話劇が多いが、本作のハルビン行きの列車内でみる密室劇は、それとは大違い。ほとんどセリフはなく、目の表情と顔の表情だけによる演技が多いから、俳優も大変だ。本作では、そんなスパイもの、列車モノの醍醐味を導入部からしっかり楽しみたい。

■□■731部隊を知ってる？万一その秘密が漏れたら？■□■

今ドキの日本の若者は満州事変そのものを知らないから、日本が建国した満州国における731部隊（正式名は関東軍防疫給水部本部）がやっていた、細菌戦に使用する生物兵器の研究開発や、それに伴う中国人捕虜に対する人体実験等の実話も知らないだろう。これらはネット情報でもすぐわかるから、本作鑑賞直後にしっかり調べてもらいたいが、本作ではそれを彷彿させる施設として“背蔭河”が登場するので、それに注目！そこには

東大、京大から優秀な医師が多数集結していたそうだから、当時の日本の倫理観(?)もひどいもの。もっとも、そこでの研究は極秘中の極秘。だってそれが少しでも漏れて、国際連盟から文句でも言われたら厄介だもの。なるほど、なるほど・・・。

ウートラ作戦は、この背蔭河から唯一脱獄した王子陽と接触、保護して海外に逃亡させ、日本軍の悪事を全世界に暴露するという任務だから、張憲臣たちは、何よりもまずハルビンに潜伏しているこの王子陽と接触しなければならない。そのため、あらかじめ様々なネタを仕込んでいたのは当然。しかし、その一部の情報がウートラ作戦を執行する前に、既にハルビンに向かう列車の中で特務科に漏れていたため、何とリーダーの張憲臣が特務科に逮捕されてしまうことに！そこから始まる拷問風景は、当然肉体を痛めつけるところから始まったが、それでは効果がないと判断した特務科の高(ガオ)科長(倪大红(ニー・ダーホン))は、かねてから研究し成果を上げていた催眠剤の使用を決定。これを注射すれば、いくら頑強なスパイでもペラペラと自白するはずだ。

3章「底牌」では731部隊を彷彿させる背蔭河と高特務科科長の姿に注目！

■□■4章迷局はまさに迷局！特務科内にも共産スパイが！■□■

中国で連日放映されていた安物のTV反日ドラマなら、そんなところで“正義の味方”が登場するかもしれないが、本作はそこに特務科の内部に潜入していた共産スパイ、周乙(ジョウ・イー)(于和偉(ユ・ホフエイ))が登場するので、それに注目！催眠剤を注射しようとした医師を殺害し、拷問室から脱出した張憲臣と合流した周乙は、張憲臣を車のトランクに隠して脱出させようとしたが、さて・・・？ここらの展開が、2章「行動」、3章「底牌」だが、続く4章「迷局」になると、既に拷問で痛めつけられた身体では任務の遂行は不可能と判断した張憲臣が、特務科に潜入しているスパイであると分かった周乙に対して後の任務を託すことになるので、それに注目！

それで3章、4章のストーリーは完結かと思ったが、さにあらず。本作では、別の車に乗り換えて門に突っ込んだ張憲臣が死にきれなかったため再び拷問にかけられ、ついに催眠剤を打たれてしまうシークエンスになる。昏迷状態の中で彼は、「亜細亜」「二四六」という単語を漏らしてしまったが、さて、これは一体ナニ？そして、4章「迷局」では、その小見出しの通り、自ら特務科に潜入しているスパイであると王郁に明かした周乙が、小蘭との接触方法を聞き出し、張憲臣から託された任務を遂行しようとするのでそれに注目！しかし、その道はまだまだ。なお一層険しそうだ。

■□■白熱怒濤のスパイ合戦に注目！もう一人の美女に注目！■□■

『007』シリーズで初代ジェームズ・ボンド役を演じたのは、ショーン・コネリー。彼が演じた『007』は、当初こそ白熱怒濤のスパイ合戦が見ものだったが、敵対する相手がソ連から架空の悪玉に変わるにつれて、次第に娯楽色とお色気色を強めていった。しかし、本作は1931年9月18日に起きた満州事変によって建国された日本の傀儡国家である満州国のハルビンを舞台に展開される“ウートラ作戦”の遂行をめぐるスパイ合戦

だから、そのリアルさは『007』シリーズのエンタメ性をはるかに超えている。

4人組のスパイのリーダーである張憲巨は、1度ならず2度も逮捕され拷問にかけられた挙句、非業の死を遂げたし、第2組の楚良も相棒の王郁を守るため死んでしまったから、残るのは2人の女スパイだけ。スパイにこんな美女がいるの？そんな疑問は当然だが、そこは映画だし、チャン・イーモウ監督作品だから、“イーモウ・ガール”を登場させるのは毎度の約束事だ。その美女が、少女のようなあどけなさを残しているものの、知性と直感力で適格な判断を下し、息詰まるようなスパイ合戦の中で常に生き残り、任務の達成に向けて着実に歩みを進めていくチーム最年少の女スパイ小蘭を演じる劉浩存(リウ・ハオツン)だ。その美女ぶりは物語が始まった当初から際立っているが、本作では途中から高科長の側近として忠実に働く秘密機関の美女・小孟も黒い服、黒い帽子に身を包んで登場するので、それに注目！

催眠剤を打たれ昏迷状態の中、張憲巨が口にした「亜細亜」とは「亜細亜電影院」のこと。そして、「二四六」とは「星期二・星期四・星期六」すなわち「火曜日・木曜日・土曜日」のことだと分析した高科長は、小蘭が映画館に現れると読んで、捜査網を張ったからヤバイ。まんまと小蘭は、その網に掛かってしまうの？それとも・・・？

本作の5章陰棋、6章生死から7章前行のラストに向けては、亜細亜電影院を舞台とした、白熱怒涛のスパイ合戦に注目！しかして、“ウートラ作戦”の成否、すなわち王子陽の救出はなるの？そして4人の選りすぐりのスパイたちのうち、最後まで生き残れるのは誰？チャン・イーモウ監督渾身のスパイ映画の醍醐味を、最後までしっかり楽しみたい。

2022(令和4)年12月20日記

『日本と中国』 2274 (2023年3月1日)



崖上のスパイ
全国順次公開中

© 2021 Emperor Film and Entertainment (Beijing) Limited
All Rights Reserved. Emperor Film, Limited China Film Co., Ltd. Shanghai Film (Group) Co., Ltd. All Rights Reserved.

監督：チャン・イーモウ
出演：チャン・イー、ユー・ホウエイ、チャン・ハイリン、リウ・ハオツツ、チュエー・ヤウエン
2021年/中国映画/中国語/シネスコ/5.1ch / 120分
原題：Cliff Walkers
提供：ニューセレクト
配給：アルパトロス・フィルム



スパイ映画の傑作は数多いがその本場は米英。CIAやM16のスパイたちは全世界で活躍中だが、1931年9月18日の瀋州事変直後の中国では？ 張藝謀監督の活躍は歴史・文芸大作から武俠モロノ・家族モノまで幅広いが、張藝謀監督とは対照的にスパイものは本作が初。共産革命の先輩・ソ連で学んだ4人のスパイ達が1934年、極寒の瀋州国に降り立つ冒険の風景は『紅いコリヤン』(87年)、『SHADOW』(影武者) (18年)と同じく超絵画的。彼らが挑む極秘のウートル計画とは？ 密室劇の面白さは列車モノで顕著。ハルビンへ向かう列車内でのスパイと特務警察との攻防戦は迫力満点だ。1章「暗号」に見る列車内スリラーの醍醐味はヒッチコック作品以上だ！
木村拓哉・織田信長・シエントは知っているも、濃姫も斎藤道三も知らない？ 世代の若者は「731部隊」も知らないはず。細菌戦のため

張藝謀監督がスパイ映画に初挑戦！時代は1934年、舞台はハルビン！
真の日中友好のために、負の遺産＝「731部隊」の検証も！

の生物兵器の研究開発は日本帝国では無眉の課題だが、同部隊での東大京大卒のエリート医師による中国人捕虜に対する人体実験の真相は？ それはともかく、4人の任務を確保し、国外に脱出させて日本軍の暴行を世界に暴露することだ。さあ、章「行動」、8章「底牌」、4章「迷局」と続く手に汗握る展開は？
スパイものをよもう面白くする王道は三重スパイや潜人スパイの存在。それを実践する本作では、中戦のカーアクションと共にスパイ間の闘いが見事。そこでは「亜細亜」と「四六」の暗号解読が不可欠だが、津浦電鉄構内とされる仲間との連携が別れるは？ 『007』シリーズは頻りに敵した本作は終始シリアスで息苦しいから心して鑑賞したい。もっとも、張藝謀作品らしく最後まで生々残る男女パイは二人とも超人だから、それにも注目！

熱血弁護士
坂和章平
中国映画を語る(72)

張藝謀の「シリーズ」をはじめ映画に関する豊富な知識(公)も、日中友好協会理事やNPO法人代表者も務める。



(さかひ・しろうく)
1949年生まれ。東京都生まれ。大阪大学法学部。都市開発に関わる職歴を経て手がけ、日中都市計画学会、石川賞、同年日本不動産学会「建築傑作賞」受賞。原和の中国語大観(2004年)『2110のオアシス』并譯す。